ISSN　2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた
教育史研究を求めて

第 15 号　2016 年 3 月 15 日

編集・発行　『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人　冨岡勝・谷本宗生）
連絡先　大阪府東大阪市小若江 3-4-1
近畿大学教職教育部　冨岡研究室
e-mail:　tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム　長崎県立農学校卒業生　内田牛一について	山本　尚史	2
逸話と世評で綴る女子教育史(15) 　ヘボン家塾からフェリス女学院と明治学院が生まれる	神辺　靖光	4
私の読書ノート、つれづれ　―学びの本質を考えよう―	谷本　宗生	7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（15） 学校沿革史にみる補習科・専攻科（11）：島根県（5）	吉野　剛弘	10
近代日本における大学予備教育の研究⑮ 　―神戸商業大学の大学予科設置をめぐる論議③―	山本　剛	14
大阪市の女子教育⑥ 　―西区女子手芸学校の授業科目―	徳山　倫子	17
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容② 　創設者の高等教育思想にみるアメリカの影響	ママトクロヴァニルファル	21
東京帝国大学農科大学（学部）実科の独立運動 　―帝国議会への請願運動②―	松嶋　哲哉	27
学生寮の時代⑥ 　― 宮沢賢治と寮生活―	金澤　冬樹	32
福島県尋常中学校第一期生の卒後（下）	小宮山　道夫	35
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（13） 　―東京府尋常中学学友会雑誌にみる生徒の言説(その 1)―	冨岡　勝	38
コラム　広島県の中3受験生自殺事件について感想あり	神辺　靖光	41
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）		44
編集後記		45

コラム
長崎県立農学校卒業生内田牛一について

山本（やまもと）　尚史（ひさし）
（長崎女子短期大学）

私はこれまで「文化交流」、中でも戦前の高等教育機関での取り組みに着目してきた。この「文化交流」という言葉はあまりにも多くの事象を含み得る言葉であり、そもそも何を「文化交流」とするのか、ということは常に問われる。留学生、日々の生活の中での外国人との交流、海外の書物を読むことまで、語られる範囲は様々である。当然のことながら、この広い概念をどう扱うか、どう考えていくのかで「文化交流」はその都度姿を変えるため、毎度頭を悩ませている。

そのような状態で勤務校のある長崎県内を歩くうちに、内田牛一という人物を知ることになった。彼は長崎県立農学校（現長崎県立諫早農業高等学校）が初めて送り出した卒業生であり、卒業後は長崎県立農学校同窓会の副会長を2期勤め、学校創立 20 周年の記念式典等では卒業生代表として挨拶に立つなど、長崎県立農学校を盛り立ててきた人物である。調べていくうちに彼は長崎県内にとどまらず海外にも足を伸ばし見聞を広げてきた人物であることが分かってきた [1]。調査を進める中で興味深いことが分かってきたが、海外の農業事情を学んできた長崎県立農学校の卒業生の足跡を追うことで、一つ「文化交流」が語れるのではないかと考えている。今回のコラムでは、そのスタートとして、内田牛一を紹介したい。

史料としては内田一平著『瑞穂を語る』である。これは 1939（昭和 14）年に長崎農民社から刊行されたものである。長崎農民社は内田牛一が設立したものであり、著者の内田一平は、これまでの調査から、内田牛一本人だと思われる。以下、内田についての紹介文を示す [2]。

内田牛一

①学校を出てすぐ小栗小学校代用教員となり、次いでは②母校助手を勤め大正四年の春支那山東省青島守備軍附属農場主任として赴任大正六年陸軍技手任命、青島軍政署農事試験場勤務、此間中部支那一帯の農業を踏査し、守備軍食糧品の現地需給を建言す。大正八年職を辞し軍経理部の指令により軍需食糧品の製造加工に従事、

陸海軍へ納入す。偶々大正十年山東還付に伴ふ守備軍の撤退により、事業を中止して故郷に帰る。大正十三年、朝鮮、満州、中支方面を視察し再び海外渡航を企てたが、家事の事情で志ならず、大正十五年一月、長崎農民新聞を起し、農業鼓吹に努む。経営七ケ年、漸く事成らんとするに及び健康を損ひ爾来三ケ年を病床に呻吟す。③大正十年三月、漸く死線を突破して再び人生の春に遭ふ。爾来百姓道に精進し自給自足して体を養ふ。大正十一年の春より、長崎県下の農村めぐりを企て、大正十二年春より朝鮮、満州、台湾、九州、関西、関東を巡遊し、世間学をなす。大正十三年春著述に没頭今日に至る。唯我独尊を信条とし独り超然、茶臼山城址の一角に隠れて、晴に耕し雨に書く。白雲悠々、自由自適の生活こそ内田昨今の真の姿である。

①学校：長崎県立農学校
②母校：同上
③大正：誤植であり、1939 年に出版されたこと踏まえれば「昭和」と思われる

内田牛一と内田一平を同一人物と考えると、この紹介文は自分で記述したものとなる。紹介文には通常「〇〇〇〇君」と一人一人に「君」が記してあるが、内田牛一だけ「君」が記されていない。その内田は中国へ渡り、農業事情を見て歩き、その後も中国、朝鮮、台湾へと渡った。内田はこれらの地域を「巡遊し、世間学をな」したと記述されていることから、海外の農業を学び続けた様子が浮かぶ。そして彼はそれらを長崎県内で新聞を通じて発信していたようである。彼は具体的にどのような活動をしていたのか、今後の課題としたい。

[1] 内田一平『瑞穂を語る』長崎農民社、1939 年、33-34 頁。
[2] 前掲内田、34 頁。

＊このコラムでは、読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史(15)
ヘボン家塾からフェリス女学院と明治学院が生まれる

神辺(かんべ)　靖光(やすみつ)（月刊ニューズレター同人）

女子が英語を勉強したのは官立東京女学校＝竹橋女学校ばかりではなかった。明治期の著名な新聞記者で幕末明治の実話聞き取りを書き続けた篠田鉱造は、明治3年に横浜にできたフェリス女学校と東京築地にできた A 6番女学校を「これが女学校鍬卸(おろ)し(はじめ)」と書いている(『明治百話』)。廃藩前のいくつかの藩が女学校をつくった同じ頃、横浜と東京築地の外国人居留地でアメリカの宣教師夫人による女学校が始まった。まず横浜のキダー Mary E. Kidder の女学校から述べよう。

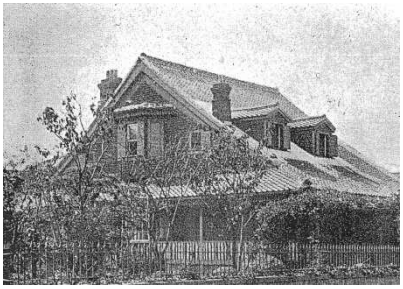
キダー女学校を述べるには、どうしてもその前身であるヘボン James C,Hepburn 塾と米国の長老派教会、オランダ改革派教会の宣教師派遣から筆を起さねばならない。

ドクトル・ヘボン
『明治学院 50 年史』より

米国のキリスト教プロテスタントの各派は 1840 年前後から日本への伝道に関心を持ちはじめていたが、最も早く、それを実行したのは米国長老教会 Presbyterian Church in the U.S.A である。1859(安政6)年、長老教会は日本伝道を宣教医師ジェームス・ヘボンに委託した。ヘボン夫妻は同年10月、来日、神奈川宿でまず医療活動をはじめた。ヘボンの医療は忽ちのうちに近隣庶民の尊敬を受けたので、彼はそれまで仮寓していた成仏寺を離れ、横浜海岸 39 番地に家屋を新築、ここを本拠に医療と宣教活動をはじめることにした。1863(文久 3)年のことである。

彼はここで歌舞伎の名女形・沢村田之助の脱疽(だっそ)の外科手術を成功させて名声を博するとともに、「新約聖書」、「旧約聖書」の日本語訳を完成させたり、「和英語林集成」を出版(ここにヘボン式ローマ字が考案されている)したりして日米文化交流に貢献した。

同じ文久 3 年、このヘボン治療所兼宣教師館で、ヘボン夫人クララが英語塾をはじめた。このヘボン塾は男女混合で幕末維新の激動の中を明治 3 年頃まで続く。少年生徒の中には後年、外務大臣になった林董(ただす)、三井物産創業に力を尽した益田孝、明治大正昭和期に政界財界で活躍し、2・26事件で暗殺された高橋是清などの逸材がいた。



横浜海岸 39 番地のヘボン家塾
文久 2（1862）年に建てられた。この洋風建物は日本人大工によるものである。
『明治学院 50 年史』より

明治 3 年7月、メリー・キダーが新潟から横浜に米国オランダ改革派 Dutch Reformed Church in America のブラウン Brown,S.R. とともにやってきた。キダーは教師の経験があるので、ヘボン塾の女生徒達を教えることにした。ヘボン夫人はすでに老齢で、若いキダーが、女生徒達を生き生きと教えるのをみて、女生徒だけの学校をつくろうと思いつく。かくしてヘボン塾のうち、女生徒だけを引きついで、メリー・キダーの女塾が成立した。これがフェリス女学校の濫觴である。

女生徒がいなくなったヘボン塾はオランダ改革派のジョン・バラー J.Ballagh が教えることになった。塾は盛んになって、人々はいつしかバラ学校と呼ぶようになった。明治10年に東京大学ができたが、在日米国宣教師の間で、東京大学は物質文明、科学万能であるから信仰に根ざしたキリスト教の大学をたてたいという意見が騰(あ)がった。 かくして明治13年、横浜のバラ学校を東京の築地に移して築地大学校 Tsukiji College が設立された。明治

14年、同じ改革派のワイコフ M.N.Wyckoff が横浜に先志学校という英語学校をつくったが、これも東京築地に移ってきたので、16年築地大学校に吸収し、東京一致英和学校と改称した。一方、前出のブラウンは横浜で英語塾を開いていた。また東京の築地では長老派のカロザース C.Carrothers が英語学校を開いていた。彼らは英語の授業をしながらキリスト教の信仰団体をつくっていった。ブラウンのグループを横浜バンドと言い、カロザースのそれを築地バンドという。横浜バンドからは後年、教育者として名をなした井深梶之助(明治学院総理)、押川方義(東北学院長)、本多庸一(弘前学院長、青山学院長)、山本秀煌、植村正久らを輩出した。この二つは明治10年に合併して東京一致神学校になった。

東京一致英和学校は英語の学校、東京一致神学校はキリスト教の神学校であるが、同じ場所で同じ教師と同じ生徒が勉強するのであるから一心同体である。二つの学校は一緒になって東京荏原区白金村(現 港区白金台)に校舎を新築し、明治20年、明治学院(現 明治学院大学)になった。初代総理(学長)にはジェームス・ヘボンが就任した。

参考文献　高谷道男『ヘボン』吉川弘文館人物叢書
鷲山弟三郎『明治学院 50 年史』
山本秀煌『フェリス和英女学校 60 年史』

私の読書ノート、つれづれ
―学びの本質を考えよう―

谷本（たにもと）　宗生（むねお）（大東文化大学）

本年レター1月号の第 13 号にて、私@谷本の休日に読んだ本をいくつか紹介したが、これが意外や一般読者に好評？であったよし。これで気をよくしてか、懲りずに私の最近読んだ本をいくつか紹介しながら、学びの本質を考えるうえでの契機としてみたい！と思うのである。

1冊めは、新刊紹介が新聞でもよく取り上げられていて気になって、手にした新書本である。室井尚『文系学部解体』（2015 年 12 月、全 238 頁）である。著者の室井は横浜国立大の教員で、現代の文教・大学政策を厳しく糾弾しているが、「大学の役割は基本的には『無知との戦い』、あるいは『無思考との戦い』である。」（同上書、201 頁）と述べ、「本当にこれでいいのかということを疑い、自分の頭で批判的に考え、行動する人々を育成し、社会に送り出していくこと」（202 頁）に他ならないと強調する。著者の室井は、「即戦力となる人材を育成せよという要求や、各大学のセールスポイントに力を注ぐ『選択と集中』の理論など、短期的なスパンでしか物事を考えないロジックが持ち込まれた。結果として文系の価値が軽んじられている…これは国立大だけでなく社会全体の問題」（「書く人『文系学部解体』　人文知軽視に危機感を」『東京新聞』2016 年 2 月 14 日）だと警鐘を鳴らしている。

2冊めは、長谷川英祐『働かないアリに意義がある』（2010 年 12 月、全 189 頁）新書本である。実は、この書をあらためて読むに至った契機は、「怠けアリ　集団存続に貢献　勤勉アリの『交代要員』　北大など確認」（『毎日新聞』2016 年 2 月 17 日）の報道を知ったからである。北大の進化生物学研究チームの長谷川は、「働かないアリを常駐させる非効率的なシステムがコロニーの存続には欠かせない。人間の組織でも短期的な効率や成果を

求めると悪影響が出ることがあり、組織を長期的な視点で運営することの重要性を示唆する結果ではないか」（同上紙面）と述べている。長谷川の著書では、生物進化学の研究知見から「いまはなんの役に立つかわからない様々なことを調べておくことは、人間社会全体のリスクヘッジの観点から見て意味のあることです。そういう『有用作物の候補の苗床』としての機能は大学以外に機関がなく、大学という組織の重要な社会的役割の一つである」（同上書、78 頁）と言及されている。大学の任務とは、いつの日にか役立つであろう新たな知識や技術、知見の探求行為であり、直ぐには役立たないであろう多数の基礎研究を持続的に実践し、それが無数に累積し、将来の応用研究の苗床@シードバンクに他ならないと。

3冊めは、荻原雄一『＜漱石の初恋＞を探して　「井上眼科の少女」とは誰か』（2016 年2月、全 187 頁）である。著者の荻原（名古屋芸術大教員）は、漱石の初恋の相手であるとする「井上眼科の少女」を執拗に調査し、新たな仮説を明らかにしたものといえよう。青年漱石は、第一高等中学校に在学しながら、本所の江東義塾（私塾）の教師として一時つとめている。塾の寄宿舎から第一高等中学校に通っていたが、劣悪な衛生環境からか急性トラホームを患い、江東義塾を辞め実家から第一高等中学校へ通学することになる。漱石は、しばしばその治療のため、駿河台にある井上眼科病院に通ったといわれる。井上眼科については、下記参照いただきたい（谷本「高等中学校生徒らの健康・衛生環境について―眼病予防・姿勢矯正・体操遊戯―」『1880 年代教育史研究会ニューズレター』44 号、2014 年 1 月、5～6頁）。1891 年 7 月 18 日に友人正岡子規に漱石が宛てた書簡にある「昨日［駿河台にある］井上眼科に行ったところで、以前君に話した可愛らしい女の子をみた」という件から、著者の荻原は井上眼科の歴史資料館にまで赴き当時の病院来診カルテ類を探索している。ネタばれは御法度ゆえ、その資料探索の結果は同上書の読者諸氏自らで知ってもらいたい！が、荻原は子規宛ての書簡にもあるとおり、その「井上眼科の少女」と青年漱石がそれ以前に遭

遇しているであろう点にも着目して調べを進めている。その少女と青年漱石が、いったいどこで初めて交わったのかという推理も、この謎解き？の醍醐味でもある。

4冊めは、野矢茂樹『哲学な日々―考えさせない時代に抗して―』（2015年 10 月、全 219 頁）である。著者の野矢は、哲学を専攻とする東京大の教員である。本書のまえがきで、「私は政治的な人間ではない。…私のようなものでも抗いがたく巻き込まれてしまう。私の勤務先は東京大学であるが、東大もなんだかおかしい。東大だけでなく、また大学だけでなく、教育そのものが変だ。」と、問題提起する。大学に関して、本書のなかで興味深い野矢の指摘がある。「大学が高校の単純な延長ではないというのは確かである。大学の教員は研究者でもある。研究者として、容易に答えの出ないことに向かって問い続けている。そしてなにより、自分で問題を見出し、組み立てていかなくてはいけない。そんな研究の現場としてのあり方が、大学の授業にもにじみ出てくる。…分かっていることよりも分かっていないことの方が多いんだ。答えは本の中に書いてあるんじゃない。問いすらも、これから自分でひとつひとつ見つけていかなくちゃいけない。…大学は、そんなときめきを学生に伝えなければいけない。」（「高校と大学」同上書、33 頁）。「問題を解決すべく規則を作り、制度を整備する。大学のために、学生のために、多くの人が奮闘している。しかし皮肉なことに、がんばればがんばるほど、規則や制度で固められ、失われていくものがある。かつての大学がもっていた、おおらかさ、伸びやかさだ。無邪気で自由な好奇心。道草を食うのがあたりまえで、『効率性』などは犬に食わせていた。そんな大学の気風が、薄れ、消えていく。…ここから抜け出さねばならない。どうすればいいのか。せめてもう少しアバウトになろう。」（「大学の気風」同上書 69 頁）。哲学者らしい野矢の鋭い示唆は、まさに的を射ている。大学生らがゆっくり読書などする時間がない（4割の学生が読書をしない！）というが、教員の側も限定された自分の研究領域の論文や専門書だけに注視していて、落ち着いて幅広い読書などに浸る環境は保持できてるのかしらと、ふと思う。

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（15）
学校沿革史にみる補習科・専攻科（11）：島根県（5）

吉野剛弘（よしのたけひろ）（東京電機大学）

今号では、補習科に入学した生徒の動向を検討したい。

表 1 は、学校沿革史に記載されている各学校の補習科の生徒数を示したものである。松江北高等学校では当初の生徒定員を 50 名に定めていたが、初年度から定員を上回る生徒を迎え入れていたことが分かる。また、表の数字には表れていないが、1971（昭和 46）年より文理分けも行われている（『松江北高等学校百年史』（1976 年），p.1601）。なお、松江北高等学校に限ったことではないが、新制高等学校の補習科は正規の学校でもなく、学校法人格を取ってもいないので、定員超過が法令違反になるわけではない。ただし、教育環境への影響は、学校側の対応次第では、大きくなる可能性は否めない。

表 2 は、松江北高等学校の補習科の志願状況をまとめたものである。これによれば、志願をしたものの入学していない生徒が存在している。『松江北高等学校百年史』には、「第一回補習科の志願者は本校卒業生を中心に県内外から八七名が志望し、四月一二日の選考試験を受けた。予想以上の受験者に入学者選考は慎重に行なわれ、結局定員五〇名に対し、教室に収容できる最大数の七三名が入学を許可された」（p.1601）とある。つまり、補習科に入るのでさえ、入学者選抜があったということである。

他校出身者の受け入れは、松江北高等学校に限ったことではない。出雲高等学校では、「生徒は本校出身者を主とし、大社高校・平田高校・大田高校・三刀屋高校・出雲工業高校などの出身者で構成された」（『出雲高等学校史』（1990 年），p.534）という。普通科高校のみならず、工業高校出身者も含まれている。

表1　補習科の生徒数

	松江北			松江南	出雲	浜田
	文系	理系	計			
1966(昭和41)			73			
1967(昭和42)			73			
1968(昭和43)			71			
1969(昭和44)			72			
1970(昭和45)			61			
1971(昭和46)			96	37		
1972(昭和47)			79	55		
1973(昭和48)			92	62		
1974(昭和49)			102	67		
1975(昭和50)			106	70		
1976(昭和51)	75	56	131	68		
1977(昭和52)	79	59	138	63		
1978(昭和53)	60	37	97	51		
1979(昭和54)	62	61	123	63		
1980(昭和55)	49	51	100	49		
1981(昭和56)	59	57	116	49		
1982(昭和57)	58	37	95	49		
1983(昭和58)	53	54	107	59		
1984(昭和59)	50	39	89	62		
1985(昭和60)	50	34	84	62*		
1986(昭和61)	40	40	80	37		
1987(昭和62)	36	27	63	41		
1988(昭和63)	44	29	73	56		
1989(平成1)	37	32	69	56		
1990(平成2)	59	30	89	53	88	
1991(平成3)	60	44	104	54	59	
1992(平成4)	56	43	99	60	110	
1993(平成5)	59	44	103	52	101	79
1994(平成6)	54	39	93	41	93	74
1995(平成7)	47	37	84	46	104	48*
1996(平成8)	47	36	83	35	78	58
1997(平成9)	49	39	88	33	65	23*
1998(平成10)	51	39	90	32	66	30
1999(平成11)	32	53	85	25	59	37
2000(平成12)	31	43	74	40	57	24
2001(平成13)	43	41	84	29		47
2002(平成14)	46	34	80	34		26
2003(平成15)	32	44	76	44		14
2004(平成16)	38	29	67	38		
2005(平成17)	13	25	38	45		
2006(平成18)				27		
2007(平成19)				21		
2008(平成20)				35		
2009(平成21)				27		
2010(平成22)				46		

*は原資料(男女別の人数との齟齬ありなど)に問題あるも、原文ママ
『松江北高等学校百年史』(1976), p.1600より
『松江北高等学校十年史—昭和五十一年～昭和六十年—』(1986), p.111より
『松江北高等学校十年史—昭和六十一年～平成七年—』(1996), p.115より
『松江北高等学校十年史—平成八年度～平成十七年度—』(2007), p.67より
『松籟』第2号(1981), pp.216-217より
『松籟』第3号(1990), p.273より
『松籟』第4号(2002), p.281より
『松籟』第5号(2013), p.234より
『出雲高等学校八十周年記念誌』(2002), p.80より
『創立百十周年記念浜田高等学校十年史』(2005), p.46より

表2　松江北高等学校補習科の入学者内訳

	志願者				入学許可者			
	北高	県内	県外	合計	北高	県内	県外	合計
1966(昭和41)	62(7)	19(2)	6	87(9)	62(7)	11(1)	3	73(8)
1967(昭和42)	78(3)	32(4)	5	115(7)	63(1)	10(2)	0	73(3)
1968(昭和43)	60(3)	20(5)	9(1)	89(9)	60(3)	10(3)	1	71(6)
1969(昭和44)	68(5)	17	3	88(5)	63(5)	8	1	72(5)
1970(昭和45)	39	22(4)	7(2)	68(6)	36	20(4)	5(2)	61(6)
1971(昭和46)	87(12)	36(1)	5(1)	128(14)	77(11)	16	3(1)	96(12)
1972(昭和47)	60(4)	21(7)	4	85(11)	58(4)	17(5)	4	79(9)
1973(昭和48)	69(14)	46(13)	2	117(27)	68(13)	23(6)	1	92(19)
1974(昭和49)	88(16)	24(2)	4(1)	116(19)	85(16)	14(1)	3	102(17)
1975(昭和50)	75(7)	46(9)	3	124(16)	72(7)	31(5)	3	106(12)
1976(昭和51)	96(18)	49(10)	2	147(28)	94(17)	36(7)	1	131(24)

( )は女子で内数

『松江北高等学校百年史』(1976), p.1600より

浜田高等学校の補習科については、一部の年度で生徒の出身校が判明する。判明する分は以下の通りである。(『浜田高等学校百年史』(1994年),p.975・p.977)

【1966(昭和 41)年度】(35 名)

浜田 18　益田 2　益田工業 1　益田産業 1　江津 5　江津工業 1

江ノ川 1　川本 1　邇摩 2　松江北 1　隠岐 1　由良育英 1

【1994(平成 4)年度】(77 名)

浜田 69　益田 3　江津 4　川本 1

1966(昭和 41)年度については、出雲高等学校と同様に普通科でない生徒も入学している。進学意欲への対応ぶりがうかがえる。

一方で、1994(平成 4)年度には浜田高等学校卒業生が圧倒的多数であるが、この間に大学進学率は上昇しているので、大学進学希望者数も上昇しているはずである。他校の卒業生で大学進学を希望して浪人した場合にどこで学んだのかは注目に値するし、それは浜田高等学校卒業生にも該

当してくる。なお、『浜田高等学校百年史』では「その多くは予備校に進んだと考えてよい」（p.977）と評している。

その 10 年後の『創立百十周年記念浜田高等学校十年史』（2005 年）では、「補習科が国公立大学に対応した受験指導を柱としている関係で、私立大学を第一志望として考えている生徒は、他の予備校で学んだ方が有利であると考えている点もある」（p.46）と評している。浜田高等学校の補習科の教育課程は現段階で分からないので確言はできないが、他校の初期の教育課程を見る限り、全教科を万遍なく履修するものが設定されている可能性が高く、国公立大学に対応しているという自己評価は、正鵠を射ているものと思われる。また、本科よりも少ない人数で運営する補習科にあって、複数のコースの設定は、高等学校本科よりも困難だったものと考えられる。

もちろん創設当初の状況と、1990 年代以降の状況とを同列に論じることはできない。しかし、大学への志願行動の多様化に対して、補習科では規模の問題から十全の対応は難しいということである。規模の問題である以上、対応できないこと自体は致し方のないことだが、その結果として生徒の予備校への流出を許している状況は、補習科というものが持つ限界として指摘することもできるだろう。ただし、補習科が正規のものではない、いわばオプションのように存在している以上、生徒の予備校への流出は補習科の存廃を左右する問題にはなるが、学校本体の存続とは関係を持たないことは、注意を要する。

近代日本における大学予備教育の研究⑮
―神戸商業大学の大学予科設置をめぐる論議③―

山本（やまもと）　剛（たけし）(早稲田大学大学史資料センター)

はじめに

前号では、神戸商大において予科問題調査会がまとめた 1930(昭和 5)年 11 月付の『予科問題調査会調査資料』のうち、他大学の大学予科に関する意見が報告されている「教育界諸氏の意見調査報告」を検討した。

大学予科の設置については、学風の樹立や「統一した」教育を施すうえで予科は必要であると主張した慶応義塾や商業系の学部教育のための基礎的な学科目は予科で行うことで教育的効果が期待できると主張した東京商大のような意見がある一方で、他大学はおおむね大学予科設置に否定的な見解であり、文部省も予科は「変則」であるとして反対していた。

こうした報告書をうけて、神戸商大では大学予科設置にむけて論議が行われた。

本号では、同大学が翌年の 1931(昭和 6)年に文部省に送付した陳情書を検討して、同大学が主張する予科設置の理由を考察する。

1　大学予科設置にむけての陳情書

1930(昭和 5)年の 12 月には神戸商大学長田崎慎治が臨席のもとで、予科問題調査会が開かれた[1]。この調査会では学内の委員のなかで、「独特の学風」を樹立し、「教育に統一性」を与へるために大学予科設置を要望する意見が出る一方で、「自己の進むべき道を真に自覚する」のは旧制高校卒業時であるし、「中等卒業時分」では、「父兄の意見に引きづられ易く道を誤る者が多い」。また、「大学の使命は研究の完成」であり「予科問題は何ら考慮に入ってこない」。さらに、「人生の修練場である旧制高校を経て大学に進

学するのが一般的である」等の大学予科不要の意見が出された。しかも学長田崎も現在は「予科設置を左程熱望していない」し、「大学の内容充実」が「重大」であるとして、大学予科設置にむけて積極的な運動は行わないとした。すなわち、この時は同大学では大学予科設置に対して学内で足並が揃わなかったことが窺える。

ところが、こうしたなかでも翌年の 1931(昭和 6)年には、「今回政府による学制改革案が審議に上された機会」をとらえて、「完全なる商業大学の」ために大学予科設置を要望する陳情を公式に文部省に送付した[2]。この陳情書は 1931(昭和 6)年 10 月 28 日付で神戸商大の教授・助教授一同が文部大臣田中隆三あてに「神戸商業大学予科に関する陳情書」(以下、陳情書)として作成された[3]。陳情書では「私等は商業大学には予科の必要なることを信ずる」として、次のような大学予科設置の利点をあげている。

(一) 大学に予科を専属せしむるときは、予科学生をして、平素大学の入学試験準備に累はさるゝことなく、安じて其の実力を養成し品性を陶冶せしめ得べく候

(二) 予科を卒業したる者は凡て大学入学することを得るを以て就学年限の延長を防ぎ、且つ大学入学難の為めに学を廃し身を誤る者なからしめ得べく候

(三) 大学教授をして予科に於ける或種の学科を兼任せしめ、其の他予科学生をして大学の設備を利用せしめ得るを以て経費を要すること少くして有効なる教養を予科学生に与ふることを得べく候

続けて「特に商業大学につきては予科の必要なる特殊の理由」としては次のように述べている。

(一) 商業大学に於ける学科中には年少の時期に於て学修せしむるを便宜とするもの有之候。而して予科に於て此等の学科を学修せしむることは、大学に於ける商学の研究を有効にするのみならず、矯激なる思想の侵入する間隙防ぐものに有之候

(二)　予科に於ては潤達進取の気風を養成すると共に或種の学科を以て実習の訓練を与ふることにより、現代青年の動もすれば欠如する勤労の精神を涵養することを得べく候

(三)　之を神戸商業大学の特殊事情より申せば、年少の青年を予科に収容することによりて、本学独特の伝統的精神を徹底的に注入し、人格の陶冶に資すること大なるを得べく候

(四)　現今我国の高等学校が主として総合大学を対象とするが如き実状は単科大学に対し不利なる結果を招来すべく候

この陳情書で述べられている主な内容としてはおおむね次の 4 点にまとめることができる。すなわち①「入学試験準備」にしばられない。したがって②「就学年限の延長を防」ぐ。さらに③商業教育」のためには「年少の時期」からの教育が必要な学科目がある。そして先に検討した④旧制高校卒業者の入学者問題も指摘している。これらの大学予科設置の理由に関する詳しい考察は、同大学が後の 1939(昭和 14)年に本格的な運動を行う時に検討するが、この時期に大学予科設置にむけて同校ではこうした意見が出されていたことを確認しておく。しかしながら、この時は財政的な理由から大学予科設置は認められず[4]、同大学では 1939(昭和 14)年の大学予科設置運動のための「機運」を待たねばならなかった。

次号では、同大学がその「機運」とした時代状況に注目し、1939(昭和 14)に本格化する大学予科設置運動を検討する。

---

[1]「予科問題調査会―その後の形勢」『神戸商大新聞』(1930 年 12 月 15 日)。

[2]「本学の発展を期し当局予科設置を陳情」『神戸商大新聞』(1931 年 11 月 15 日)。

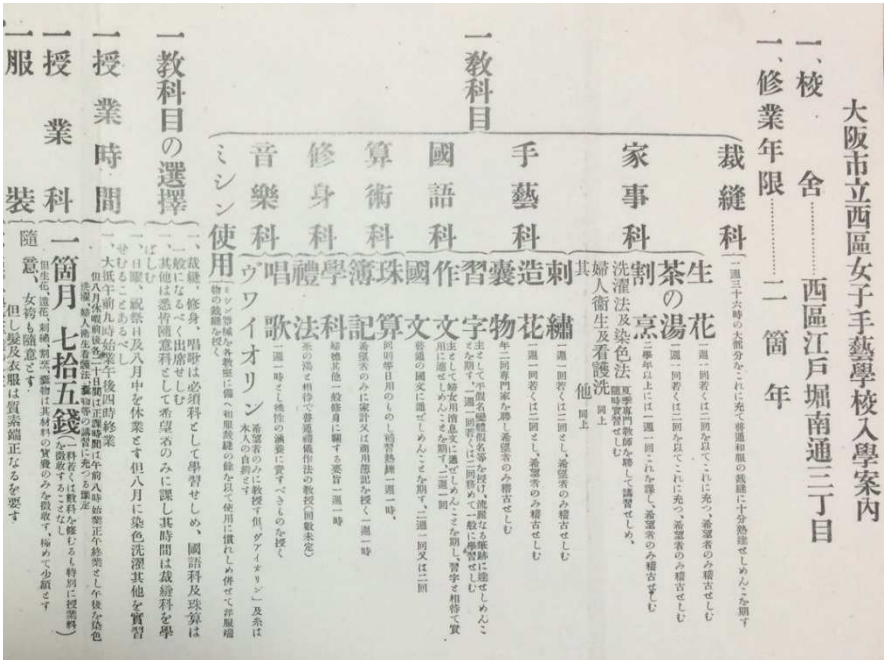
[3]「神戸商業大学予科(調査資料)」神戸大学文書史料室所蔵。

[4] 前掲「本学の発展を期し当局予科設置を陳情」『神戸商大新聞』(1931 年 11 月 15 日)。

大阪市の女子教育⑥
―西区女子手芸学校の授業科目―

徳山　倫子（京都大学大学院）

下の図は、「大阪市西区女子手芸学校入学案内」（1912（明治 45）年 2 月 20 日現在）の前半部分の写真である[1]。今回は、この入学案内の内容を中心に、同校における授業科目について検討する。



大阪市立西區女子手藝學校入學案内

一、校　舍……西區江戸堀南通三丁目

一、修業年限……二　箇　年

一教科目

裁縫科

一週三十六時の大部分をこれに充て普通和服の裁縫に十分熟練せしめんことを期す

家事科

生花　一週一回若くは二回なるべくこれに充つ、希望者のみ稽古せしむ

茶の湯　一週一回若くは二回なるべくこれに充つ、希望者のみ稽古せしむ

割烹　一學年以上には一週一回これを講し、希望者のみ稽古せしむ

洗濯法及染色法　夏季專門教師を聘して講習せしめ、婦人衛生及看護法　同上

其他　同上

手藝科

刺繍　一週一回若くは二回とし、希望者のみ稽古せしむ

造花　一週一回若くは二回とし、希望者のみ稽古せしむ

國語科

作文　年二回專門家を聘し、希望者のみ稽古せしむ

習字　主として平假名變體假名等を授け、流麗なる筆跡に練習せしめんことを期す、一週一回若くは二回修めて一般に練習せしむ

算術科

物品記名　主として一回若くは二回修めて一般に練習せしむ

簿記法　主として婦人用消息文に通ぜしめんことを期し、習字と相伴て實用に通ぜしめんことを期す、一週一回

珠算　一週一回

修身科

國文　修身、唱歌は必須科として學習せしめ、國語科及珠算は各學級の國文に通ぜしめんことを期す、二週一回又は三回

禮法　希望者のみに家計又は商用簡記を授く、一週一時

學科　婦德其他、一般修身に關する要旨、一週一時

音樂科

唱歌　希望者のみに教授す、但し「ヴァイオリン」及琴は本人の自費とす

ミシン使用　ミシン等機械を各教室に備へ、和服裁縫の縫物の裁縫を授く

一教科目の選擇

一、裁縫、修身、唱歌は必須科として學習せしめ、國語科及珠算は一般になるべく出席せしむ、其他は悉皆隨意科として希望者のみに課し其時間は裁縫科を學ばしむ

一、日課、祝祭日及入月中を休業とす但八月に染色洗濯其他を實習せしむることあるべし

一授業時間

大抵午前九時始業午後四時終業

但八月中は午前八時始業正午終業とし午後は染色法、婦人衛生法、藥物等の講習に充つる筈

一授業科

一箇月　七拾五錢（一科若くは數科を修むるも特別に授業料を徴收することなし）

但生徒、道具、刺繍、製菓、藥物は其材料の實費のみを徴收す、極めて少額とす

一服裝

隨意、女袴も隨意とす

但し髮及衣服は質素端正なるを要す

この写真では文字の読解は困難なため、前半部分の記述について、以下に引用する。

大阪市立西区女子手芸学校入学案内

一、校舎…西区江戸堀南通三丁目

一、修業年限…二箇年

一、教科目

〇裁縫科…一週三十六時間の大部分をこれに充て普通和服の裁縫に十分熟達せしめんことを期す

〇家事科・生花…一週一回若くは二回を以てこれに充つ、希望者のみ稽古せしむ

・茶の湯…一週一回若くは二回を以てこれに充つ、希望者のみ稽古せしむ

・割烹…二学年以上には一週一回これを課し、希望者のみ稽古せしむ

・洗濯法及染色法…夏季専門教師を聘して講習せしめ、随時実習せしむ

・婦人衛生及看護洗（原文ママ）…同上

・其他…同上

〇手芸科・刺繍…一週一回若くは二回とし、希望者のみ稽古せしむ

・造花…一週一回若くは二回とし、希望者のみ稽古せしむ

・嚢物…年二回専門家を聘し希望者のみ稽古せしむ

〇国語科・習字…主として平仮名変体仮名等を授け、流麗なる筆跡に達せしめんことを期す、一週一回若くは二回務めて一般に学習せしむ

・作文…主として婦女用消息文に通ぜしめんことを期し、習字と相待て実用に適せしめんことを期す、二週一回

・国文…普通の国文に通ぜしめんことを期す、二週一回又は二回

〇算術科・珠算…回則等日用のものし補習熟練一週一時（原文ママ）

・簿記…希望者のみに家計又は商用簿記を授く一週一時

〇修身科・学科…婦徳其他一般修身に関する要旨一週一時
・礼法…茶の湯と相待て普通礼法作法の教授（回数未定）
〇音楽科・唱歌…一週一時とし徳性の涵養に資すべきものを授く
・ヴワイオリン（原文ママ）…希望者のみに教授す但「ヴアイオリン」及糸は本人の自弁とす
〇ミシン使用法…ミシン器械を各教室に備へ和服裁縫の余を以て使用に慣れしめ併せて洋服端物の裁縫を授く

一、教科目の選択
・裁縫、修身、唱歌は必須科として学習せしめ、国語科及珠算は一般になるべく出席せしむ
・其他は悉皆随意科として希望者のみに課し其時間は裁縫科を学ばしむ

一、授業時間
・日曜、祝祭日及八月中を休業とす但八月に染色洗濯其他を実習せしむることあるべし
・大抵午前九時始業午後四時修業
但八月休暇前後各二十日間は正課時間は午前八時始業正午修業とし午後を染色洗濯、婦人衛生看護法、嚢物等の講習に充つる予定

一、授業料
・一箇月七拾五銭（一科若くは数科を修むるも特別に授業料を徴収することなし）
・但生花、造花、刺繍、割烹、嚢物は其材料の実費のみを徴収す、極めて少額とす

一、服装
・随意、女袴も随意とす
但し髪及衣服は質素端正なるを要す

（後半部略）

これらの内容から、週 36 時間の授業のうち、必修科目は「裁縫科」・「修身科」・「音楽科」のうちの「唱歌」のみであり、他は選択科目であったことが判る。同校の校名には「手芸」という名称が入っているにも関わらず、最も重視された科目は「裁縫」であり、「手芸」の授業時数は少なく必修科目ではなかったことは興味深い[2]。

同入学案内の後半部には、「入学者ノ資格」や「担任教師」についての情報が記されている（教員の個人名の記載があるため後半部の写真の掲載は控える）。教員について着目すると、「修身科」は西区第一高等小学校の校長が、「国文科」・「習字科」ならびに「唱歌」・「ヴアイオリン」はそれぞれ西区第一高等小学校の訓導が兼任している。他の科目については嘱託教員であり、「裁縫科」には「元東京女子職業学校教員」や「東京裁縫学校出身」の者等が、「造花」は「東京造花学校出身」の者が、「割烹科」は「大阪割烹学校主任」が、「生花」は「東山新流家元」が、「茶の湯」は「千家裏流宗匠」が担当していた。また、「嚢物」・「洗濯用及染色法」・「婦人衛生、育児法、看護法」は「斯道専門の士を招聘し年数回臨時講習の方法により教授す」とされていた。このように、嘱託教員は私立各種学校の教員・卒業生だけでなく、その道の専門家が招聘されることもあったようだ。

次回は、このような授業を受けた同校の生徒層について、今回は引用しなかった後半部の内容とも関連させながら検討する予定である。

---

[1] 同史料は『西区第一高等小学校西区女子手芸学校一覧』に挟み込まれていた。

[2] 明治期において「手芸」と「裁縫」という用語は混同されて用いられていたと考えられるが、ここでは詳細な検討はひとまず控える。両者の差異や類似点等ついては山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』（世織書房、2005 年）等で考察されている。

戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容②
創設者の高等教育思想にみるアメリカの影響

ママトクロヴァ　ニルファル（早稲田大学）

日本の女性の教育の実践においてアメリカの影響とみられるものを大きくわけると、3 つの流れが存在する。第 1 の流れは、キリスト教系女学校の創設である。つまり、1859 年より来日し、日本の女子教育の発展に大いに貢献した、アメリカの伝道会社に属する人々の影響である。彼らは、日本の近代的教育の先駆者となり、神戸女学院、フェリス女学院、同志社女学校、青山学院女子部など、日本の多くの女子教育施設の起源を築いた。第 2 の流れは、20 世紀初頭における津田梅子（1864－1929）や成瀬仁蔵（1858－1919）らによる教育思想面での影響である。彼らは、アメリカの女子大学の影響を強く受け、日本でその実践を試みたのであった。津田によって創設された女子英学塾、成瀬によって創設された日本女子大学校は、日本の女子高等教育の発展に偉大な影響を与えたのは周知の事実である。第 3 の流れは、第二次世界大戦後の女性解放政策とその思想に基づいた男女平等の教育改革が、アメリカの占領軍（GHQ）の主導下で展開されたことである。

本号では、第 2 の流れの一端を明らかにするために、津田と成瀬の思想形成に重要な役割を果たしたアメリカ留学の実態と彼らに影響を与えた人物に絞って考察する。

津田梅子といえば、6 歳で日本初の女子留学生としてアメリカに派遣されたことで有名だが、その留学の実態とはどのようなものだったのか。彼女をアメリカで預かったのは、当時ジョージタウンで日本弁務使館の書記官だったチャールズ・ランマンと（Charles Lanman、1819-1895）と妻のアデライン・ランマン（Adeline Lanman、1826-1914) であった。チャールズ・ランマンは、画家、記者として活躍し、陸軍省の司書官を務め、国務省・内務省・国

会などの図書館の整理に従事した人物であった。彼の各種出版物は 30 冊余にのぼり、1000 を超えるほどの絵画を遺している。アデライン・ランマンは、裕福な家庭の出身で、当時最高の教育を授けていた、ヴィジテーション修道院という女子セミナリーで 16 歳まで教育を受け、結婚してからは慈善事業や、禁酒運動などに積極的に参加した人であった。津田は、11 年間（1871 年～1882 年）をランマン家で過ごすこととなり、ランマン家は人格形成期を迎えていた彼女に多方面にわたって影響を及ぼした。

1872 年からスティヴンソン・セミナリー(Stephenson Seminary)と呼ばれるコレジエート・インスティテュートに通い始める。この学校は 1 学級の生徒数約 7～10 人、全生徒数も約 100 人の小規模な私立学校であった。この時期の重要な出来事として津田のキリスト教入信が挙げられるが、これは津田の後の教育理念の重要な要素となっていた。そして、アメリカの有名な詩人ロングフェロー（Henry Wadsworth Longfellow）やホイッティア（John Greenleaf Whittier）と面会するなど、詩人や詩の世界に出会い、数多くの詩に親しむようになるが、後年、英詩による教育を重視したのも、始まりがここにあった。

1878 年に、アーチャー・インスティテュート（The Archer Institute）という、全生徒数 100 人に過ぎない、ワシントン市内の私立のハイスクールに入学した。ここでは、一般科目の他に、女子校では珍しい科目も教授されていた。津田は、心理学、天文学、英文学、フランス語、ラテン語、音楽、絵画などを学んだ。この時期から、スコット（Scott）、ディケンズ（Dickens）の小説、シーザー（Caesar）、ジョセフィヌ（Josephine）、ダーヴィン（Darwin）の伝記など、ウォーズウォース（Wordsworth）、バイロン（Byron）、テニスン（Tennyson）、シェイクスピア（Shakespeare）の詩を読んでいた[1]。津田が女子英学塾で試みた英詩、英文学を通しての女性の見識を養う教育方法に反映されたが、それにつながる要素がここに見出される。また、このときから勉強のほかに観劇、チェス、クロッケー、ローンテニス、と趣味を広げていくが、

これらも、後年女子英学塾で試みられた実践の対象になっていた。

津田は、1882 年にハイスクールを卒業し、日本へ帰国するが、予想以上に遅れていた日本の女子教育の実態に直面し、その中で自分にできる職を模索し、そして再度のアメリカ留学を決意するに至る。1889 年 7 月、ブリンマー・カレッジ（Bryn Mawr College）へ留学した。前号で紹介したように、ブリンマー・カレッジは他のアメリカ東部の女子大学より創立の日も浅く、規模も小さかったが、知名な学者が多いことや、厳格な教育と堅実な学風などで知られていた。ギリシャ語、数学、哲学など当時男性だけに与えられていた学問の学級的な教育機会が女性に与えられ、カリキュラムや教育水準はオックスフォード、イェール、プリンストンに順ずるものだった。

津田は生物学を専攻し、在学 2 年目よりモルガン教授と共同研究をはじめ、「蛙の卵の発生」（“Orientation of the Frog's Egg”）という論文を完成させた。この論文は、1894（明治 27）年にイギリスの季刊紙「マイクロスコピカル・サイエンス」（*The Quarterly Journal of Microscopical Science*, Vol.35）に掲載された[2]。

そのほか、化学、歴史、哲学、倫理学、論理学、心理学、経済学などの科目を学習した。1892 年 6 月に 3 年間の課程を修了したが、修了証明書には、在学中の 2 年半の間に、歴史、生物学、英文学、化学、経済学、哲学の諸科目を修め、すべてに優秀であったこと、勤勉な学生で、特に生物学、化学において優れた才能をもっていること、英語力も見事で、特に英語の教授に最適であることなど、記されている[3]。

津田に大きな影響を及ぼした人物は、ブリンマー・カレッジ在学中に学部長を努めていたマーサ・ケアリー・トーマス（M. Carey Thomas, 1857－1935）であった。トーマスは、コーネル大学で学士号を取得した後、大学院教育が受けられず、博士号取得のためにヨーロッパに留学し、チューリヒ大学で女性として初めての博士号を取得した人であった。トーマス博士はフェミニストの教育者であり、ブリンマー・カレッジの創設に深くかかわり、同大学におい

て学部長、後に学長を務めた。また、女性の教育機会拡張のために尽力し、そのようなトーマスの姿が津田にとってよい模範となり、津田が彼女に受けた刺激は大きかった。

次いで、津田は教育・教授法の研究のために 1891 年 2 月からオスウィーゴ師範学校（The Oswego Normal School）で半年ほど在籍した。同校はペスタロッチ主義に基づいて開発的な教育をすることで有名であった。同校は女子高等師範学校の校長になった高嶺秀夫が 1874 年に留学したのをはじめ、多くの日本人が留学した学校であった。

この時期の出来事としてアリス・ベーコン（Alice Mabel Bacon, 1858－1918）の著書『日本の女性』（*Japanese Girls and Women*）の著作の執筆を手伝ったことがあるが、これは津田の日本女性の状況に対する認識が一層固まった要因となり、学校を作る希望が膨らんだ。

このように、ブリンマー・カレッジに留学した津田は、選科生として高等教育を受けることができたが、彼女は単に学問を身に付けたのではなく、一人の教育者として思想を固めることとなった。

一方、成瀬仁蔵は、1890 年末に 32 歳のときにアメリカ留学を果たした。始めは、ボストン郊外にあるアンドーヴァー神学校（Andover Theological Seminary）で新神学、社会的福音、社会改良運動、社会学などを学んだ。

成瀬の思想形成に重要な影響を与えたのは、新進の社会学者タッカー（William Jewett Tucker,1839－1926 ）である。タッカーは、アンドヴァー神学校で教授、後にダートマス・カレッジ学長を務め、1881 年にアンドヴァー・ハウスを創設した神学者、社会活動家であった。成瀬は、タッカーを通して社会学を学び、社会改良者としての自己の使命を自覚し、自由主義的神学思想の影響を受けた。

1892 年 6 月より、マサチューセッツ州にあるクラーク大学（Clark University）の教育学部研究科に在籍し、教育学や社会学、キリスト教などを学んだ。ここでは、同大学総長である心理学者のスタンレー・ホール

（Granville Stanley Hall, 1844−1924）や他の学者たちと接することができ、交流を行った。

1893 年には、生涯の恩師であった澤山保羅の伝記 *A Modern Paul in Japan*（『澤山保羅伝』）を出版し、1894 年 1 月には帰国するが、アメリカ滞在中に、多くの教育家、宗教家、活動家などに会い、さまざまな大学を訪問した。そして、クラーク大学在学中に女子教育の研究に集中した。

特に、女性の役割を考えるきっかけとなったのは、レヴィット師（Horace Hall Leavitt, 1848−1920）の家庭でホームステイしたことであった。レヴィット夫人は、7 人の子育てをしながら、地域の奉仕活動に熱心だった賢明な女性であった。その姿や家族関係、夫婦関係に感銘を受け、日本の女性の在り方を考えさせられた[4]。

成瀬の女子教育研究の指導をした人々は、セブン・シスターズの学長らであった。ウェルズレー・カレッジのフリーマン・パールマー前学長（Alice Freeman Palmer）、マウント・ホリヨーク・カレッジのミード学長（Elizabeth Storrs Mead）、スミス・カレッジのシーリー学長（Laurenus Clark Seelye）、ヴァッサー・カレッジのテーラー学長（James Monroe Taylor）、ブリンマー・カレッジのロード学長（James Evans Rhoads）と面会し、女子大学の視察を行った[5]。

その中で特にウェルズレー・カレッジに注目し、同大学の教育内容、教育方法、寮生活の運営などを調査した。ウェルズレー・カレッジのリベラル・アーツ教育および全寮制度をモデルとし、日本女子大学校で再現しようとした[6]。

このように、アメリカ留学は、成瀬の帰国後の女子高等教育の実践において基盤となったと考えられる。

津田と成瀬の留学経験とその中で影響を与えた人々について考察したが、両者は留学期間の差も大きく、異なる経験や人物を通して、異なる思想を形成し、それらが教育の実践に反映されたのであった。

[1] 吉川利一『津田梅子伝』津田塾同窓会、1956 年、pp.127－128。

[2] 『津田梅子文書』津田塾大学、1980 年、英文、pp.4－14 に掲載。

[3] 前掲書『津田梅子伝』、pp.188－190 に掲載。

[4] 仁科節編『成瀬先生伝』桜楓会出版部、1942 年、p.110。

[5] 『成瀬仁蔵著作集　第一巻』日本女子大学、1974 年、pp.31－32。

[6] 「ウェルズレ―女子大学観察略記」同書、pp.221－226。

東京帝国大学農科大学（学部）実科の独立運動
――帝国議会への請願運動②――

松嶋（まつしま）　哲哉（てつや）（日本大学大学院）

はじめに

1922 年、東京帝国大学農科大学（学部）実科に宇都宮移転問題が浮上した（詳細は、13 号参照）。これに驚いた駒場校友会は、建議案の再提出によって、議会に対する請願運動を展開していく。本号では、宇都宮移転問題後の建議案に注目し、そこで主張されている論理を明らかにしたい。

再度の建議案提出

宇都宮移転問題に際して、1923 年 2 月 2 日、有馬秀雄議員が中心となって建議案を衆議院に提出した。この建議案で実科独立の論理として語られていることは以下の通りである [1]。

> 政府は盛に各地に専門学校を創設し或いは既設専門学校を昇格し、又は研究科を附設する等専ら高等教育機関の充実を図りつゝあるに拘らず独り此の歴史あり且功績顕著なる実科に対し何等の考慮施設を加へざるを遺憾とす

建議案で語られている実科独立の論理は、政府による高等教育機関の拡充政策と矛盾しないということであった。事実、1921 年には東北帝国大学に附設されていた工学専門部が仙台高等工業学校として独立し、1922 年には宇都宮高等農林学校の設置が決まっていた。このような中、「歴史あり且功績顕著なる実科」が独立を果たせていない現状を批判することにより独

立を要求するのであった。

建議案は、有馬の趣旨説明を受けて「東京帝国大学農学部実科に関する建議委員会」に付託された。1921 年に提出された建議案が、「小学校教員俸給国庫負担額増加に関する建議案外四件の委員」に付託されていたことと比べると、実科独立問題への関心が高まったことが明らかである。委員としては、今泉嘉一（委員長）、有馬秀雄、梅田潔、中倉万次郎、福井甚三、内藤濱治、小野重行、野澤伝一郎、松下禎二が選ばれた[2]。

実科独立に関する委員会での議論は次号の課題とする。本号では、衆議院予算分科会における議論に注目しその論理を明らかにしたい。

予算分科会における実科独立議論

予算分科会では、実科独立に関して直接的な議論がかわされていた。その議論の口火を切ったのは、志賀委員による「実科生を他の何か農林学校の方へ、移してしまうと言うようなことを聞くのであります、……其点のご説明を仰ぎたいと思ひます」という質問であった[3]。

志賀委員の質問に対して、文部省専門学務局長松浦鎮次郎が政府側委員として答弁にたった。実科の移転問題に対しては、「文部省としては是が円満に実現することを得れば一の解決方法だと考えて」いるとしながらも「恐らくは今日に於ては其方法を実現することは出来得まいと考えて居ります」と明言した[4]。

しかし、文部省は実科の独立を積極的に認めたわけでなかった。文部省は実科が大学に附設されている利点を強調する。「大学の附属の学科に実科を置くと言ふことは、一面から申しますると是は非常な利益があるのでありまして、詰り大学教授、一流の学者であります大学教授の教授を受けると云ふことが出来るのでありまして、是は普通の農業専門学校よりも其点に於ては大学にくつ付ていると云ふことが利益なのであります」[5]。

実科が大学に附設されている利点を強調する文部省に対して、原田議員

が大学に附設されていることの問題点を指摘する。つまり、実科の設置根拠が農科大学令の第一条にすぎず、教授会の決議によって実科が廃止される可能性のことである。これに対して文部省は、「よもや文部省当局の了解を得ずして、左様な決議をする」ことは「萬々無いと信じて居ります」としながらも、仮に決議があった場合は、「それに応じて考えなければなりませぬ」と答えた[6]。

原田は、文部省の回答にたいして「私共の杞憂が一掃されたやうな感」があると答えながらも、実科の独立を要求する。その際、実科の役割を高等農林学校との比較の中で次のように強調していた[7]。

> 農林学校の卒業生必ずしも役に立たぬと云ふ私は考へでは無いのであります、併しながら高等農林学校の卒業生は学理を学んで出ました結果、地方に出ましても、教室に於ける学理の教授は甚だ普及して居りますが、実習地に出ました際に肥料を運ぶときなどは、全く農学の――農と云ふ頭は持つて居りますけれども、良い(ママ)穢い厭やだと云ふやうな工合に、肥料の運搬など云ふことに付ては、全く鼻を摘んで嘯いて居るような始末である、其処に参りますと実科を出ました、詰り実習を了へて出ました各府県の農業教師なり若くは農会の技師是等の如き者は自ら鍬を執り、肥料の間に没頭して、親しく生徒と共に其実地の練習をされて居ますが、此生徒と共に鍬を執り実習すると云ふことか、学生の教授の上に於きましても又は精神的に感化の大なることは今更申すまでもない事であります、

原田は、実科の特徴を実習教育に求めたのであった。高等農林学校の卒業生であっても、「学理」に走り実習を「穢い厭だ」と拒否するのにたいして、実科は「生徒と供に鍬を執り実習する」ため、学生の教育上良いと評価する。このように、実科の特徴を実習教育に求めることは珍しくない。しかし、その

場合、帝国大学農学部との比較で語られるのであって、実科の特徴を高等農林学校と比較して「実習」に求めていることは注目される。原田の評価がどの程度実態を反映していたのかは不明であるが、実科の意義として実習教育が強調されていることは明らかであろう。

おわりに

以上、建議案および予算分科会の議論で語られていた実科独立の論理として、次の 2 つを指摘することができる。第一に、実科の独立を高等教育拡充政策の中に位置づけ専門学校増設計画に実科の独立を求めていたことである。つまり、実科の独立は政府の政策と矛盾していないことを強調するのであった。第二に、実科の役割として実習教育の有用性を強調していたことである。実科における実習教育は高等農林学校と比較しても優れていることを強調することによって、実科独立の有用性を主張する。

このような、実科独立の要求に対して文部省は一貫として曖昧な態度をとった。松浦は、「農科大学実科と云ふことの将来に付て、篤と攻究をしなければならぬ問題であらうと思ふのであります」とはぐらかし、鎌田栄吉（文部大臣）は、「唯今攻究中」として判断を留保する。

文部省の曖昧な態度に対して、岡田良平は厳しく追求し実科の独立を要求した。岡田は、前任の文部大臣（中橋徳五郎）が「大学と此専門部は独立された方が宜い別に建てる方が宜しいと」発言したことを引き合いに文部省の態度を追求する。しかし、文部省は「主義に於いては独立を致して之を改善いたしたならば宜いと思ふ、併しながら……唯今申す通り攻究中でございます」と明言をさけるのであった[8]。

岡田はさらに文部省を追及する。「将来攻究するのはどういふ事か何が攻究の余地のあるものか御攻究も宜しい、研究するといふのはどういふ点を研究するのかそのことを迄伺つて置きたい、若し特別の事項が無いならば之は研究の名を仮りて運動が無い故に之を無視した、こう解釈するより外がない

と私は思ふ、どういふ点を御研究になるどういうふ点が御決りにならぬのか其点を詳細に承はりたいと私は思ひます」と[9]。

岡田の追及に対して文部省は、その「攻究」内容として、独立案、大学附設のまま予算配分を行う案をしめす。さらに、独立させる場合であっても、どこに学校を設置するのか、実習地の確保などの「経済問題」の検討が必要だとする。文部省は、「さう云うやうな方法を実は研究をして居るのでありまして、まあ財政及学校の都合の宜しいと云う両方面から今まで研究してまいらなければならぬと考えて居ります」と答えのであった[10]。しかし、この文部省の答弁には実科独立問題が積極的に「攻究」されている様子が読み取れないのは筆者だけだろうか。

1　駒場校友会編『母校独立記念号』1936 年、194 頁。

2　同前書、196 頁。

3　同前書、196 頁。

4　同前書、197 頁。

5　同前書、196-197 頁。

6　同前書、199-200 頁。

7　同前書、200 頁。

8　同前書、203 頁。

9　同前書、205 頁。

10　同前書、207 頁。

学生寮の時代⑥
― 宮沢賢治と寮生活―

金澤（かなざわ）　冬樹（ふゆき）（東京理科大学職員）

●宮沢賢治と寮生活

宮沢賢治は明治 29（1896）年の生まれだから、今年で生誕 120 年になる。賢治が盛岡高等農林学校の学生であったことはよく知られているが、そこでの寮生活が与えた影響はあまり知られていないようだ。盛岡中学を卒業した賢治は、盛岡高農に首席で入学、寄宿舎である自啓寮に入寮する。寮では室長もつとめる一方、同室だった友人とは文学や思想などを通じて刺激し合い、その後の人生に大きな影響を与えたとされている[1]。

●寄宿舎の目的と運営

前号のニューズレターでは、学校種別の学生居住状況（1939 年当時）を見た。その中でも、盛岡高農などの農業関係の学校は、学校寄宿舎の割合が多いことが分かった。調査対象 15 校のうち、ほとんどの学校で学生寄宿舎の割合が 3 割以上であった。

今回は、それら農業関係学校の寄宿舎について見ていくことにしよう。なお、前回使用した文部省教学局『学生生徒生活調査』（1939 年）に即して、1939 年前後の時期に絞り、寄宿舎の規則を検討する。

【寄宿舎の目的】

まず、寄宿舎の目的である。盛岡高農[2]では寄宿舎を「本校ノ教育ト相俟テ本科学生ヲシテ心身ノ修養ニ努メ兼テ協同生活ヲ体得セシムル所トス」としている。また、他の学校でも「寄宿舎ハ学生修養ノ場所ナリ自己ノ責任ヲ自覚シ公徳ヲ重ンシ規律アル共同生活ヲ営ミ教育ノ趣旨ヲ完フセムコトヲ期ス

ヘシ」（岐阜高農 3）、「学生心身ノ修養品性陶冶ノ処トス」（鹿児島高農 [4]）などとされ、寄宿舎は「修養」の場であることが示されている。また、「心身ヲ修養シ特ニ自治協同ノ精紳ヲ養成スル所トス」（鳥取高農 [5]）、「自敬、自重ノ念ヲ以テ共同自治ノ精紳ヲ発揮スルコト」（鹿児島高農）のように、「自治」の語も確認できる。

【運営体制】

盛岡高農では、寮長 1 名、副寮長 3 名、室長（各室 1 名）が置かれ「生徒主事及学生課員指導ノ下ニ寮務を掌理ス」としている。寮長と副寮長は室長が、室長は寮生が、それぞれ互選し候補者を出し、前者は学生課長、後者は学校長が任命するとされている。鹿児島高農では、各寮に総務委員 2 名、室長（各室 1 名）が置かれ、総務委員は「在寮二年生中ヨリ之ヲ選挙シ学校長之ヲ許可ス」となっている。

このように各寮では、寮長や室長の寮生による「選出」が行われていたと同時に、議決組織が設けられていたことも窺える。京都高等蚕糸学校 [6] では、舎長 1 名・副舎長 1 名・委員若干名を置かれており、委員による「委員会」が組織されていた。この委員会では舎長が委員会議長、副舎長が副議長となっている。委員会の「会議要項」では、「一、舎内ノ風紀振粛ヲ図ルコト」「二、舎内各部清潔整頓ヲ図ルコト」「三、火ノ元及戸締ニ関スルコト」「四、諸達、命令、規約ヲ伝達シ之レカ実施ヲ図ルコト」「五、其ノ他寄宿舎一般ニ関スルコト」が挙げられている。なお、委員会の議決は「生徒主事ノ許可ヲ得テ之ヲ実施スヘシ」としている。

鳥取高農では、寮生が寮長 1 名・副寮長 1 名・寮務員若干名を「選出」し、寮長と副寮長は「詮衡ノ上学校長之ヲ任命」し、寮務員は「生徒課長ノ許可ヲ経テ寮長之ヲ委嘱ス」と定めている。議決組織としては、寮長・副寮長・寮務員で構成する「寮務員会」があった。寮務員会は寮務を審議し、その決議は「生徒課ヲ経テ学校長ノ許可ヲ受ケ之ヲ実行ス」とされていた。注目すべ

きは、寮務員会に生徒課員が「列席スルコトアルヘシ」とされている点である。

●「自治」と管理

以上、農業関係学校の寄宿舎の規則について見た。「自治」を標榜する一方で、生徒課など学校の管理も注目される。もちろん、戦時体制下に入っていく 1939 年前後の時期ということもあり、それ以前の時期とは様相が異なるだろう。大正初期に宮沢賢治が過ごした自啓寮と、1939 年の自啓寮とは寮生数や運営方法で変化があったことが想像される。

今後は時代ごとの規則を見ていくとともに、規則に対して実態はどうだったのか、検討していく必要があるだろう。

---

[1] 菅原千恵子『宮沢賢治の青春―“ただ一人の友”保阪嘉内をめぐって』角川書店 2010 年。

[2]「自啓寮規程」盛岡高等農林学校編『盛岡高等農林学校一覧 自昭和 10 年至昭和 11 年』1936 年 p71-74。

[3]「寄宿舎規則」岐阜高等農林学校編『岐阜高等農林学校一覧 昭和 2 年度』1927 年 p65-66。

[4]「寄宿舎規則」鹿児島高等農林学校『鹿児島高等農林学校一覧 自昭和 10 年至昭和 11 年』1936 年 p47-48。

[5]「寄宿舎規則」鳥取高等農業学校編『鳥取高等農業学校一覧 昭和 14 年至昭和 15 年』1939 年 p51-53。

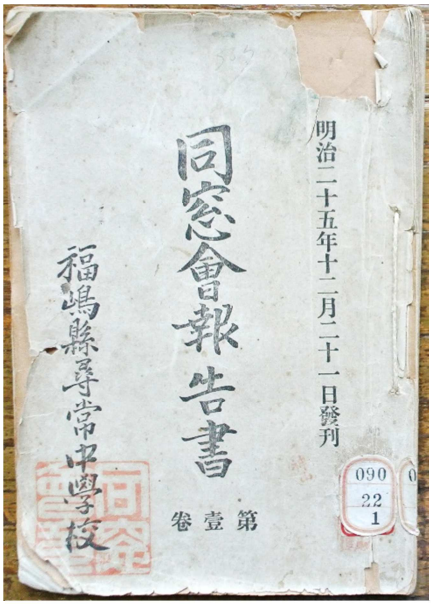
[6]「寄宿舎規程」京都高等蚕糸学校『京都高等蚕糸学校一覧 自昭和 7 年至昭和 8 年』1932 年 p90-93。

福島県尋常中学校第一期生の卒後（下）

小宮山（こみやま）　道夫（みちお）（広島大学）

前号に続き福島県尋常中学校『同窓会報告書』第1巻（明治 25 年 12 月 21 日発行）の「先輩の経歴」掲載の第一期生の消息をみていこう。

紹介されている 6 人目は「佐治喜作君」。



『同窓会報告書』第1巻（明治 25 年 12 月 21 日発行）の表紙（安積歴史博物館所蔵）

> 青眼鏡を掛け紺の綿入半纏を着し皮カバンを肩より腰に掛け草鞋脚絆を穿ち純乎たる商人風是れ第一期の卒業生佐治喜作君にあらすや君が家若松滝沢町にありて雑貨商を営む俗に荒物屋と云ふ（中略）君思慮周到殊に自ら奉すること極めて節倹嘗て身を親戚に寄せて福島の中学にあるや月資僅々三円に出さりしと云ふ而して数学は君が特得の長所にして新城君と相拮抗す（中略）他日岩越鉄道敷設の暁に於て商旗を磐梯風に翻へし以て会津商業の木鐸となるものは君を措て将た誰にか求めん君は現齢二十一年七ヶ月なり

実家の許しを請うて時限を切って尋常中学に学び、家業に戻ったようであるが、その後については不明である。話題に上っている岩越鉄道はちょうどこの年に福島県知事に就任した日下義雄が地域発展のために鉄道は不可欠

として路線開通に情熱を傾けていたもので、おそらく尋常中学校の生徒らもその敷設計画には関心が深かったのであろう。岩越鉄道が設立をみるのは1896 年(明治 29 年)1 月のことである。

続いて「山田三郎君」。

> 明治二十二年七月を以て第一高等中学校予科第一年に入学せしも都合ありて間もなく退校し郷里に帰る（中略）翌二十三年八月出京二十四年八月工業学校に入る本年七月腸窒布斯に罹り大学医院に入院すること月余治療百方気力頻る復す八月帰省し九月初旬病全く癒えしを以て出京せり学校を欠席するもの殆んと三十有余日是を以て筆記謄写の類畳々机上に堆積して寸暇なし目下同校二年生たり

東京工業学校一覧を念のため確認すると、『東京工業学校并附属職工徒弟学校一覧　従明治廿四年至明治廿五年』49 頁に化学工芸部染織工科第一年の欄に「山田三郎　岩代」と名前がみえる。同じく『東京工業学校并附属職工徒弟学校一覧　従明治廿五年至明治廿六年』53 頁では第二年に、『東京工業学校并附属職工徒弟学校一覧　従明治廿六至明治廿七年』58 頁では第三年に「山田三郎　福島」とある。『東京工業学校并附属職工徒弟学校一覧　従明治廿七至明治廿八年』73 頁には再び第三年に「山田三郎　岩代」とあり、留年していることがわかる。『東京工業学校并附属職工徒弟学校一覧　従明治廿八至明治廿九年』82 頁の卒業生名簿には「京都市染織学校　山田三郎　福島」とあり、無事卒業し京都市染織学校に奉職していることが確認できる。

続いて「小檜山源次君」。

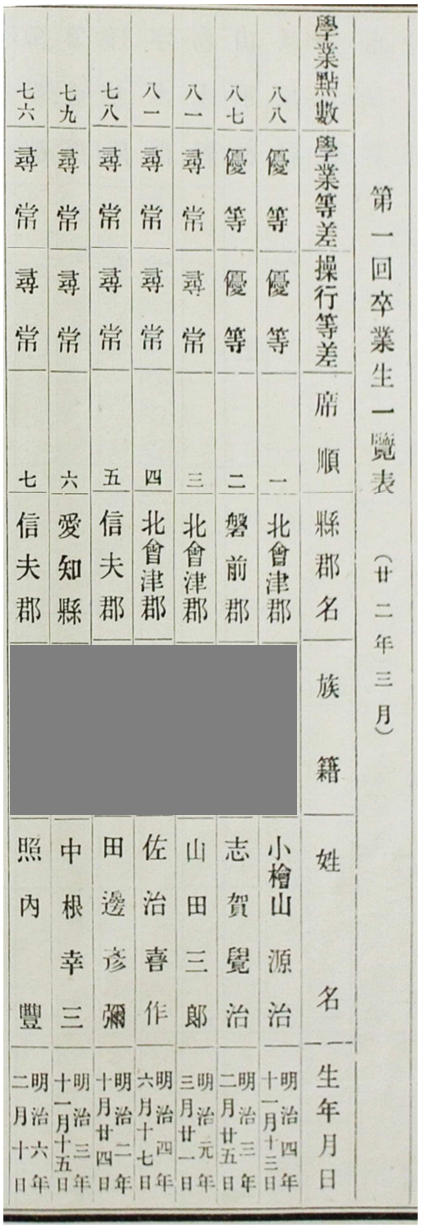
「（前略）君の本校を出つるや七月を以て東京に上り駒場農学校の募集に応す遂に意を果さず郷里に帰り居ること数閲月にして職を本県学務課に奉し判任見習生となり月俸拾弐円を給せらる」とあり、農学校への進学を志した

が実現できず県庁勤めをしているとのこと。

最後に「中根幸三君」。

「（前略）君の本校を出てゝより已に五裘葛而して闃として一も聞知する所なく君か同学の友と雖とも猶且つ其住居を詳にするものなし遽然として来り忽然として去る嗚呼雲の如しとは其れ君の謂か（君の住所現況等御承知の方は御報知あらんことを請ふ）」と卒業後三年余りで早くも行方不明となってしまっている。

なお、『福島尋常中学校第六年報』掲載の「第一回卒業生一覧表」（右図）によれば、首席卒業は「学業点数」88 点の小檜山源治、以下順に 87 点の志賀覚治、81 点の山田三郎、同点の佐治喜作、78 点の田辺彦彌、79 点の中根幸三（田辺と中根の点数は誤記とも思われるが、第二回卒業生も「学業点数」と「席順」の齟齬がある）、76 点の照内豊の順で、「学業等差」と「操行等差」の項目がともに「優等」と記載されているのは小檜山と志賀の二人で、他は「尋常」と記されている。



第一回卒業生一覽表（廿二年三月）

學業點數	學業等差	操行等差	席順	縣郡名	族籍	姓名	生年月日
八八	優等	優等	一	北會津郡	[redacted]	小檜山源治	明治四年十一月十三日
八七	優等	優等	二	磐前郡		志賀覺治	明治三年二月廿五日
八一	尋常	尋常	三	北會津郡		山田三郎	明治元年三月廿一日
八一	尋常	尋常	四	北會津郡		佐治喜作	明治四年六月十七日
七八	尋常	尋常	五	信夫郡		田邊彦彌	明治二年十月廿四日
七九	尋常	尋常	六	愛知縣		中根幸三	明治三年十一月十五日
七六	尋常	尋常	七	信夫郡		照内豊	明治六年二月十日

第一回卒業生一覧表
（『福島尋常中学校第六年報』明治 23 年 4 月、24 頁所収）
＊編集上の判断で画像の一部にマスキングを施しました（編集世話人）

どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（13）
―東京府尋常中学学友会雑誌にみる生徒の言説(その 1)―

冨岡（とみおか）　勝（まさる）（近畿大学）

第 11 号から第 14 号まで、東京府尋常中学校校長である勝浦鞆雄の校友会活動観を検討してきた。本号では同校の校友会雑誌である『学友会雑誌』を通して生徒たちの校友会活動観を明らかにしてみたい。

すでに述べてきた通り、勝浦鞆雄は、中学校における「特性の涵養」「精神的訓練」といった広い意味での徳育を重視し、そのための「精神的訓練」を充実させたいという中学校論を著書『中等教育私議』などを通して提起した人物であり、「精神的訓練」のための方策の一つとして校友会組織である学友会を 1890 年に東京府尋常中学校に設立した。

そして勝浦が学友会に期待したのは、1)学友会での諸活動（運動や雑誌編集など）を通して生徒たちが自分たちの役割や責任を果たすことで新しい時代における「社会制裁」の基礎をつくることと、2)生徒間および生徒・教員間を「親睦友愛」の情で結びつけることで、機械的な学校管理に陥らない「精神的訓練」を行えるようにすることの 2 点であった。

こうした勝浦の学友会に対する期待と、学友会雑誌に見られる生徒たちの言説とを比較してみたい。今号から数号は、第 1 号（1891 年 11 月 26 日刊行）から第 20 号（1896 年 9 月 23 日刊行）の記事からいくつかの記事を取り上げる。

最初に紹介するのは、第 2 号に掲載された鉄腸生（生徒のペンネームと思われる）による「人は人物と成る可し芸者と成る勿れ」という記事である。

鉄腸生と名乗る生徒は、勝浦会頭（学友会規則により、校長が学友会会頭に就任した）による学友会への期待に賛同を示し、その実現を誓っている。

曩に我会頭は我学友会てふ団体に於て先つ社会制裁の基礎を確立し以て明治青年の模範となるへきは論を俟たす之を大にしては本邦将来に於ける道義の淵源となり風教の根蔕となり之を小にしては一身一家の本務を完遂せんことを以て我等に望めり我等は誓て其必遂を期す[1]

鉄腸生は、勝浦の期待を実現するために、技術的な面しか学ばず志尚と気力に乏しい「芸者」になるのではなく、志尚と気力に優れた「人物」になろうという趣旨の「「嗚呼予輩の最も愛重すへき青年諸君よ徒らに芸能の末をのみ追て此神州を誤る勿れ」[2]という呼びかけをおこなっている。

しかし、こうした鉄腸生のような生徒の呼びかけにもかかわらず、学友会の活動を通して具体的にどのようにして社会制裁を確立して人物を養成するのか、という論は、学友会雑誌の誌面を見る限り、極めて少ない。

例えば、第 4 号に掲載された清友と称する生徒による「学友会雑誌の価値」と題した記事がある。

清友は、記事の前半で学友会雑誌の目的について学友会雑誌第 1 号の勝浦校長による「学友会雑誌発刊ニ就テ」の内容を以下のように確認している。

本会雑誌ハ如何なる目的を以て起りしか、如何なる必要を以て発刊せられしか、其目的と必要とハ既に諸君の認識せらるゝ所、今更余輩の喋々を要せざるなり、本誌第一号に於て学友会々頭ハ本誌発刊に就てと題し学友会ハ東京府尋常中学校職員及び生徒を以て組織せられたる私設の事業なれとも、当初本会を創立せし所以よりしても本会が施為する目的よりしても東京府尋常中学校てふ名義の下に立つ者なれは、表面に公私の別あるも裏面ハ固より学校と同一の目的を持って生存するものなりと然らば即ち本校は表面なり、本会ハ裏面なり、彼と此とは異名同体なるを以て、本校の長所も本誌に因って現はれ、短所も亦従つて現ハるゝなり[3]

このように記事が始まっているので、勝浦の論に忠実に学友会雑誌の価

値、例えば編集作業を責任をもって実行することによる「社会制裁」の確立や諸活動を雑誌で紹介することによる校内親睦の推進などについて書かれているのだろう、と想像しながら読み進めた。しかし、どうも力点の置き方が予想とは異なっている。清友は記事の後半で次のように述べる。

> 本誌発刊以来号を重ぬる既に三、其掲載する所のものハ皆諸君が多年研鑽の功を積し結果なり〔略〕本誌は本校の特性を現はすものなり、本会の特質を発表するものなり、本校の特性ハ諸君に因つて発揚せられ、本会の特質ハ本誌に因て発達するものなり雖然本誌ハ唯に本校の特性を現し、本会の特質を現はすに止らんや併せて文章錬磨、学術研究をも宜く謀るべきなり、雑誌部規則第一条に曰く、本部ハ会員の文芸を練修し併せて本会諸務を報道する目的を以て雑誌を発刊すと且本誌の目的既に在り今以後本会の目的を貫徹して本誌の価値を高らしむる一に諸君の奮勉如何に或るのみ[4]

「精神的訓練」と校内の「親睦友愛」を重視する勝浦校長の学友会についての方針を表面的には踏襲しながらも、ここで清友が力点を置いているのは、学友会雑誌を通した文章錬磨や学術研究の必要性であるように読み取れる。

学友会の活動を通して具体的にどのように「精神的訓練」や、校内の「親睦友愛」を進めるのかという見解をほとんど示さないという傾向は、次号で紹介するように、他の生徒による記事にも現れている。

---

[1] 『学友会雑誌』東京府尋常中学校学友会、第 2 号、1892 年 2 月 12 日、11 頁。

[2] 同前掲書。

[3] 『学友会雑誌』第 4 号、1892 年 7 月 8 日、39 頁。

[4] 『学友会雑誌』第 4 号、1892 年 7 月 8 日、40 頁。

コラム
広島県の中3受験生自殺事件について感想あり

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）
（月刊ニューズレター同人）

広島県のある町立中学校の男子生徒が、誤った万引記録に基づく進路指導を受けた後に自殺した。この事件は昨年2015年12月に起こったことだが、本年2016年3月男子生徒は万引記録と無関係、つまり進路指導に使われた万引記録は誤記であったという町教育委員会の記者会見からラジオ、テレビのニュース、新聞がとりあげはじめた。記者会見では町教育長と学校長が、誤記の経緯を説明し、誤記に基づく進路指導が誤りであったことを謝罪した。

このニュースを見て、私は奇異な感じを受けた。まず、教育長も学校長も誤記のデータ管理が不充分だったことがこの事件の元凶であっかのように語り、担任教諭がこの誤記データを用いたことの誤りを指摘するに止った。実は担任は自殺した生徒に万引の事実を確かめた。生徒は否定したが、担任はこれを認めず、データ記録によって志望高校の推せん枠からはずしたのである。生徒の言うことよりデータ記録を信じるというこの担任は教師と言えるだろうか。雑務が多くなり、父母、生徒、地域社会いろいろの立場からの発言、批判の中に立つ教師が唯一頼れるのが学校保存のデータであるとしたら、人間の信頼関係によって立つ教育は崩壊したと言わねばならない。

記者会見でも、その後のメディアにも担任は登場しない。学校長、教育長が管理者として担任をかばったようにみえる。責任を組織の中にかくして曖昧のうちに消してしまう20世紀日本がつくり出した官僚主義の最たるものである。

自分は万引をしていない、という発言を聞かず、誤ったデータによって推せんからはずされたから、身に覚えのない罪を着せられた生徒は自殺したのである。担任の責任は重い。担任は記者会見に同席して自分の非をあやまるべきであった。

学校長は生徒が自殺した翌日の全校集会で生徒の死を急性心不全と伝え、後にそれが偽(いつわ)りだったと反省している。不自然さを感じる。校長は生徒の自殺をその日のうちに家族の知らせで知っていた。自殺だからこそ全校集会が行われたのだろう。病死であったら全校集会を開く必要がない。すでに自殺の噂がたっていたから、すてておかれず集会になった。そして私立高校推せんにはずれたことと自殺の関係が明るみにでることを恐れて急性心不全で死んだと偽ったのである。

広島県の進学事情はわからないが、一般情況として少子化のいま、高校進学に特別推せん枠などないのである。私立高校としては少しでも多くの応募者がほしい。有力な中学校長に応募者をたのむ私学は多い。疑えば、この私立高校推せんに校長が一枚かんでいたと言えよう。

全校集会の翌日、即ち2015年12月10日、自殺生徒は万引記録と無関係と判明したと言う。もっと早く判明していたと思うが、それはさておき、それから本年3月8日、記者会見で教育長・校長が連立って誤記録データを認めるまでの期間はあまりに長い。3ヶ月かかっている。この間、校長は、高まる非難の前で、この事件の釈明を考え抜いた。そして誤記録とそれを知らずに、これによって進路指導してしまったことにすべての責任をなすりつけてしまった。そこには、①2年前(自殺生徒が1年生の時)のいたずら半分の万引を、犯罪者と同列の記録として学校データに載せる必要があるのか、②学力試験のほかに、このような素行による推せんは必要か、素行の推せんは可能か、という反省はない。こうした教育的配慮を欠いた校長のこの事件に関する責任は重い。

中3受験生徒自殺事件の私の所感文は一応これで終わるが、この事件の背後には次のような教育問題が潜在する。

①通信広報メディアの発達によって教師は直接の人間交流よりもメディアによる交流・知識の獲得が多くなり、メディア知識を重視するようになった。直接人間交流が最も大切な中学校で、生徒の言うことよりも学校データを信じ

たこの事件はその最たるものである。教師と生徒の信頼関係はどうしたら回復できるか。

②大学や高校は入学の段階で自分の学校に合う学生生徒を集めようとする横着な態度を改めるべきである。往年の物理学校のように応募者は全員入学させ、学年末試験によってどしどし落第させて最後に残った者だけに卒業の栄冠を与えるのが理想だが、万時大規模のなった現在、それが無理なら適当な学力試験だけで足りる。あくまで自分の学校の責任で学生生徒を集め、卒業させる自覚を持つべきである。

③中学高校における学習到達度記録や行動記録は飽くまで当該学校の反省や研究の材料に用うべきで、進学や就職のために用いるものではない。外部からそれを求められたら担任教師が口頭または文章で伝えればよい。

④小中高等学校の教育責任者は学校長である。教育委員会ではない。いじめの大津事件の時、教育委員会の責任が前面にでて、校長の姿が見えなかった。戦前の小中学校校長は権威があった。教育委員会が出しゃばるから、無責任な官僚主義がはびこるのである。

以上4点については述べたいことが多々ある。これらについて会員読者で異論、反論、同感があればぜひ聞かせてほしい。その上で議論、激論になれば本紙面はもっと面白くなるだろう。

＊このコラムでは、読者の方からの投稿もお待ちしています。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限 3 年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限 1 年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年 600 円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事 1 本分の分量は、A5 サイズ 2 枚～4 枚ぐらいを目安とします。

8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターの PDF ファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に 1 回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

編集後記

今年は夏目漱石没後 100 年、来年は生誕 150 年を迎えます。東京理科大学は漱石と少なからずゆかりがあり、小説『坊っちゃん』の主人公は東京物理学校（東京理科大学の前身）卒業という設定です。また、創立者は漱石と交流があり、例えば第 3 代校長の中村恭平と漱石は東大の同僚で、住まいがご近所で親交があったとされています。この時代の教育関係者の人的ネットワークは興味深いですね。（金澤）

アニメ『フランダースの犬』（1975 年）放映 40 年。将来はルーベンスのような画家になりたい！と願う主人公ネロは、周りの人の「やさしい心ってどうしたら絵に描くことができるんだろう？」（第 38 話「ネロの大きな夢」）と悩みます。苦労や挫折の末に、ネロはずっとみたかった！聖母大聖堂のルーベンスの「キリストの昇架」「キリストの降架」をみることが叶い「マリアさまありがとうございます…ぼくは今すごく幸せなんだよ」（第 52 話「天使たちの絵」）と呟き、愛犬パトラッシュと一緒に大好きな母親と祖父が待つ天国へと旅立ちます。僕は、画家ルーベンスの精神は時を超えて少年ネロの心にも芽生えた？のではないかと信じています。（谷本）

先日、愛知大学の東亜同文書院大学記念センター主催のシンポジウム「海外からの大学引き揚げをめぐる問題とその位相」に参加いたしました。旧制愛知大学への転入予科生の課題など非常に興味深い内容でした。

(山本剛)

2 月・3 月は学外に出て授業見学や研究会などが少しできました。先日は 18 歳選挙権と主権者教育に関する研究会（「第 14 回授業工房」大阪高生研後援、3 月 14 日、於大阪）に行ってきました。「先生はどこまで話していいの？生徒はどこまで活動できるの？」というつっこんだテーマに関して、高校教員や弁護士などが盛んに意見交換をしていて議論が進みつつあるのを実感しました。本ニューズレターもコラムが二つ寄せられました。とくに神辺は賛否両論の議論を期待しているそうです。みなさんぜひ。（冨岡）

職場でよく知る方のご子息が東京理科大学に進学されるという朗報を聞きました。それもなんと長万部の学生寮で過ごされるとのこと。不思議なご縁に思わずにんまりしました。（小宮山）

本ニューズレターを印刷される場合、Adobe　Reader　などの「小冊子印刷」機能を使って A4 サイズ両面刷りにすれば、ちょうど A5 サイズの小冊子になります。